

ラップと中東の社会・政治変動

山本薫

二〇一七年五月に静岡芸術劇場で上演されたシリアの演劇作品「ダマスカス While I Was Waiting」には、アサド政権打倒を求める民衆蜂起に加わったシリア人青年が、希望と絶望のほざまで揺れ動き、苦悩する姿が繊細に描き出されていた。口語のセリフや自然体の演技など、シリアの若者たちのリアルな今を表現するための工夫が様々に凝らされているひとつに、舞台上でのDJパフォーマンスがあった。DJを取り入れた演出の意図について質問した筆者に対し、脚本家のムハンマド・アルIIアッターは、「それが今の若者たちのムードだからさ」と端的に答えてくれた。

DJのリズムにのせて言葉を繰り出すラップは二〇〇〇年代以降、若者たちの自己表現のひとつとして中東全域に広がり、定着するようになった。もともとストリームの文化であるラップが急速に身近な存在になったのには、インターネットの普及が深く関わっている。ユーチューブやサウンドクラウドなどのサイト上には、中東各地の若者たちが投稿したラップの音源や手作りのミュージックビデオが溢れている。その多くは社会的、政治的なメッセージを含んでおり、児童婚の被害をラップで訴えたアフガニスタン人の少女ラッパーなど、世界的な話

題になったケースも少なくない。

中東の多くの国々では三〇歳以下の若者が人口の過半数を占める。高等教育が普及する一方で若年層の失業率は高く、政情不安や古い価値観との軋轢など、さまざまな生きづらさを抱えた若者たちにとって、高価な機材や演奏技術を必要とせず、路上でもインターネット上でも発表の場が見つかるラップ音楽は、自分たちの声を社会に届ける格好のツールとみなされる。くわえて、中東には詩や語り物など、口頭の言語芸術の豊かな伝統があり、今でもそれらが生活の中に息づいていることが、ラップを受け入れ、育む土壌になっている。

アラブ圏においてラップの役割が大きく注目されるようになったきっかけは、いわゆる「アラブの春」だ。二〇一一年一月にチュニジアで当時のベンアリ大統領が辞任に追い込まれたのを機に、長期政権打倒を求める民衆蜂起がエジプト、リビア、イエメン、シリアなど、他のアラブ諸国にも波及していった。若者たちを中心に、女性を含めた幅広い年代層と社会階層が参加したこの「アラブの春」と呼ばれる一連の政変では、歌や詩やグラフィティなどのアートが座り込みやデモの現場から自然発生的に登場し、それがSNSなどを通じて拡散するこ

とによって、さらに多くの市民の動員へとつながった。検閲の網をかくぐってアンダーグラウンドで若者たちの間に広まっていたラップもまた、抗議行動への参加を促す呼び水となった。

チュニジアではエル・ジェネラルというラッパーが二〇一〇年十二月に『大統領』という曲を発表、同月に路上で物売りをしていた青年の焼身自殺が起きた。この事件を機に抗議のデモが拡大する中で、政権を鋭く批判するアラビア語ラップを立て続けに発表していたエル・ジェネラルは当局に拘束される。数日後に釈放されたものの、その名声はむしろ高まり、『大統領』はチュニジアの革命に火をつけた一曲として、世界的に注目された。

国民の名においてお前に告げる

多くの人が飢え、仕事を求めてる

でも誰も耳を傾けない

通りに出てその目で見てみる どんなに警察が横暴か

何がお前の国で起こっているのか見えないのか

あまりにも多くの不正を俺は見た

だから俺は声を上げてる

だけどもみんな俺に警告する、「刑務所におちこまれるぞ」ってな

(エル・ジェネラル『大統領』より一部抜粋)

チュニジアに続いて当時のムバーラク大統領の長期政権打倒を目指した抗議行動が激化したエジプトでは、ラーミー・ドンジュアンという当時無名のラッパーが『反政府』という曲を

ユーチューブに投稿し、やはり革命を代表する一曲として広く知られることとなった。

反政府 不正の根は深い

反政府 俺は千も証拠を掴んでる

お前に本当に血が流れてるなら 沈黙はもうたくさん

大声で叫べ 俺は反政府だ 俺には価値があるからだ

反政府だ 敗北を受け入れるなんて無理だ

(ラーミー・ドンジュアン『反政府』より一部抜粋)

同じようにアラブの春の動きが広まった国々ではどこでも、若者たちが政治的なラップをインターネット上に発表する現象が見られた。これによってラップやグラフィティといった若者文化が、社会や政治の変化や、それに対する人々の意識を映し出すものとして、より幅広い関心を集めるようになっていく。

筆者自身がラップに興味をもったきっかけは、パレスチナのラップグループ、DAMとの出会いだった。イスラエルによる追放や占領の経験を通じて、パレスチナの人々は文学や映画、音楽、美術など、豊かな抵抗文化を育んできた。そうした抵抗文化の系譜のなかで、ラップは二〇〇〇年代以降、もつともパワフルで影響力のある表現として、パレスチナ社会に受け入れられている。多くのラッパーたちが活動しているだけでなく、各地の文化センターなどでラップは、非暴力での意思表明の手段として子どもや若者たちに教えられ、ヒップホップ・ダンスも含めたコンテストがハマース支配下のガザ地区で行わ

れたりもしている。

ラップがパレスチナ社会で認知されるにあたって中心的な役割を担ったのがDAMというグループである。彼らは一九九九年頃からアラビア語で政治的なラップを発表しはじめていたのだが、ちょうど二〇〇〇年に第二次インティファダと呼ばれる対イスラエル民衆蜂起が発生した。それに共鳴して二〇〇一年にネットの音楽サイトで発表した『誰がテロリストだ?』は、ひと月で百万回以上ダウンロードされ、DAMの名を一気に知らしめた。

誰がテロリストだ?

俺がテロリストだって?

そんなはずあるかよ

俺は自分の国に住んでるだけだぜ

俺が平和に抗ってるんじゃない

平和が俺に抗ってくるんだ

平和が俺を壊そうとする

俺の文化を消し去ろうとする

(DAM『誰がテロリストだ?』より一部抜粋)

DAMのメンバーたちはイスラエルで生まれ育ったパレスチナ人だ。パレスチナ人といえば、国外に追われた難民か、いまだイスラエルの占領下に事実上置かれているパレスチナ自治区の住民が想起されるであろうが、実はイスラエル国内にも大勢のパレスチナ系住民が暮らしている。国籍上はイスラエル人である彼らが、インティファダに立ち上がった占領下の

人々の気持ちを代弁し、自分たちもパレスチナの一人であるというラップを通じて表明したことは大きなインパクトがあった。こうしたDAMの活動に影響を受けたラッパーたちが、ガザ地区とヨルダン川西岸地区とイスラエル国内とを分断する有形無形の壁を乗り越えて、一つにつながっていく様子は、『自由と壁とヒップホップ』というドキュメンタリー映画に生き生きと描かれている。この映画は筆者が本学の研究プロジェクトの一環として日本に紹介したことがきっかけとなり、二〇一三年に日本全国で公開された。その翌年にはDAMの来日公演も実現している。



(写真1:『自由と壁とヒップホップ』DVD)

先に述べたように、パレスチナを含めたアラブ諸国にとどまらず、ラップは中東各地の若者たちのあいだで自己表現の手段として広がっている。一方で、欧米諸国で生まれ育った中東系の出自を持つラッパーたちも活躍しており、彼らと中東在住のラッパーたちがインターネットを介してコラボレーションしたり、実際に共演したりする例も見受けられる。たとえば、イラク系イギリス人の Lowkey が二〇一〇年に発表したパレスチナ連帯ソング『Long Live Palestine 2』には、イラク系カナダ人の The Narcicyst やパレスチナ系イギリス人女性のシャディア・マンズール、パレスチナの DAM やテヘラン在住のイラン人



(写真2：日本発売された DAM のアルバム)

ラッパー High-Kas など、多くのアーティストが参加し、英語、アラビア語、ペルシア語でラップを繰り広げた。

シオニストはユダヤ人に限らない

ユダヤ人がシオニストとは限らない

パレスチナ、ラーマツラー、西岸、ガザのために

そろそろインティファダをグローバル化する時だ

(Lowkey 『Long Live Palestine 2』より一部抜粋)

このようにラップは、文化と政治が交わるグローバルな現象として、きわめて興味深い展開を中東で果たしているのである。